

「自己を磨き，学び続ける子」の育成を目指した 生活科研究

愛知教育大学附属名古屋小学校 今川昌幸，榊原督，小嶋智博

I 生活科における「自己を磨く」子どもの姿の設定

平成20年度から22年度まで『『自分の考え』をしっかりともつことができる子』の育成をめざした教科指導というテーマで研究を行ってきた。3年間の研究を通して生活科では，具体的な活動や体験を通して得た気づきを関連付けて「自分の考え」をもった後，友達の考えを知り「自分の考え」を再構築することで，対象への気づきやかかわり方を深めることができた。そして，「自分の考え」を生かしたいという願いを実現するための活動をしたことで，「自分の考え」が実生活においても使えることを実感し，これからの生活につなげる願いをもつことができた。

前シリーズ研究で追究してきた，対象への気づきやかかわり方を深めることは，生活科において最も重要なことである。学習指導要領において，「具体的な活動や体験を通して，自分と身近な人々，社会及び自然とのかかわりに関心をもち，自分自身や自分の生活について考えさせるとともに，その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ，自立への基礎を養う」ことが目標とされている。「自立への基礎を養う」ために，子どもたちが対象への自分なりの願いをもちながら主体的に働きかけられるような具体的な活動や体験を設定し，その中で自ら考え判断しながら対象への気づきやかかわり方を深めさせ，実生活へ生かしていけるようにすることが大切である。この対象への気づきやかかわり方こそが，生活科における必要な資質や能力であり，今後も対象への気づきやかかわり方をさらに深められるような指導のあり方を模索していく必要がある。

一方，前シリーズ研究を進める中で，対象への自分なりの願いはもっているものの，主体的に活動に取り組むことが十分にできない子どもがいたという課題が残った。単元「紙トンボを作って遊ぼう」を例にして述べる。子どもたちは「もっとよく飛ぶ紙トンボを作りたい」という願いをもち，「牛乳パックで羽根を作ったらよく飛んだよ」「羽根を大きくしたらよく飛んだよ」などと自分なりに【材料】や【羽根】などを工夫しながら活動に取り組み，気づきを得てきた。本校生活科では，【材料】や【羽根】などといった対象への気づきやかかわり方として子どもたちに着目させたい点を【視点】と呼び，学習を進める上で大切にしてきた。これまで，この【視点】については，それぞれの〔試す段階〕の授業の導入において教師から提示してきた。子どもたちは教師の提示を見て，「そうか，【羽根】を工夫すればいいのか」と工夫するとよいポイントを知ることができた。ところが，「先生と同じように小さい【羽根】の紙トンボを作ればいいのか」と教師の提示について頼ってしまい，「【羽根】を今までやったことがない形に工夫して飛ばしてみよう」と主体的に試行錯誤しながら活動に取り組むことが十分にできない子どもの姿も見られた。その結果，活動が広がらなかつたり，うまく飛ばせないと先に進めず活動が停滞してしまったりする姿が見られた。また，「今度は【飛ばし方】を工夫してもっとよく飛ばしてみたい」といった次時への新たな願いがもてない姿も見られた。

生活科は、対象とかかわる中で自分なりの願いをもち、その願いを基に具体的な活動や体験をし、その活動や体験の中で考え、工夫し、問題を解決しながら自らの願いを実現していくという学習過程を大切にしている教科である。したがって、子どもたちに願いがなければ、活動が充実したものにならないのは言うまでもない。子どもたちに願いをもたせるためには、対象との魅力的な出会いの場を用意するとともに、その願いがつながるような学習過程を展開していかなければならない。そのためには、対象とかかわる中で「そうだったのか!」「やってみたい!」などと驚きや発見といった感動を味わわせることが大切であると考える。そして、この感動を味わうことによって、子どもたちは主体的に試行錯誤しながら具体的な活動や体験に取り組んでいき、対象への気付きやかかわり方をさらに深めることができると考える。

こうした姿を、生活科では本年度の研究テーマである「自己を磨く」子どもの姿と考える。よって、以下のように子どもの姿を設定し、研究を進めることにする。

「自己を磨く」子どもの姿

対象への気付きやかかわり方を深めるために、主体的に試行錯誤しながら具体的な活動や体験に取り組もうと努める姿。

Ⅱ 基本的な学習の流れ

生活科において、単元構成を考えていく際に最も大切にしていることは、子どもたち一人一人に願いをもたせることである。よって、以下に示すように、段階と段階の間や、授業と授業の間の子どもの願いがつながっていくことを大切に単元構成をしている。

また、前シリーズ研究の成果を受けて、繰り返し対象とかかわる中で考えをもち、友達とかかわる中で自分がもっていた考えを見直していく。そして、こうした過程でもった考えを生かすことで、実生活へつなげる願いをもたせることができるような指導過程を展開することとする。

【出会う段階】 単元を通じた対象と出会い、自分とのかかわりの気付きにつながる具体的な活動や体験をし、対象に対する自分の願いをもつ。

- | | |
|--------|----------------------------------|
| 学習活動 1 | ① 対象と出会う。
② めあてを確認する。 |
| 学習活動 2 | ③ 自分とのかかわりの気付きにつながる具体的な活動や体験をする。 |
| 学習活動 3 | ④ 活動を振り返り、次時への願いをもつ。 |



【試す段階】 前時にもった願いを基に、対象に対する自分なりの願いを具体的にもち、その願いを基に、試行錯誤しながら対象とかかわっていく。そして活動や体験を振り返り、次時への願いをもつ。この一連の活動を繰り返し行う中で、考えをもつ。

- | | |
|--------|--|
| 学習活動 1 | ① 前時までの活動を振り返る。
② 対象への新たなかかわり方を知り、対象に対する自分なりの願いをもつ。
③ めあてを確認する。 |
| 学習活動 2 | ④ 活動の見通しをもつ。
⑤ 試行錯誤しながら具体的な活動をし、対象とかかわる。
(気付きを得ていくごとに「はっけんカード」(付箋紙)に記入する。) |
| 学習活動 3 | ⑥ 活動を振り返り、対象とかかわる中で気付いたことを学習プリントに記述する。
⑦ 気付きを全体で発表し合い、次時への自分なりの願いをもつ。
※【試す段階】の最後には、これまで得た気付きを基にして、考えをまとめる。 |



【深める段階】 前時にもった願いを基に、友達のとこかかわりながら、友達のとこかかわりながら、友達の考えを試したり、自分ももっていた考えを確かめたりする。そして、活動を振り返り、自分ももっていた考えを見直していく。

- 学習活動 1**
- ① **【試す段階】** の最後にもった願いを想起する。
 - ② 友達の考えを知り、対象に対する自分なりの願いをもつ。
 - ③ めあてを確認する。

- 学習活動 2**
- ④ 本時の見通しをもつ。
 - ⑤ 自分見通しを基に、友達とこかかわりながら、深く追究する。

- 学習活動 3**
- ⑥ 活動を振り返り、自分ももっていた考えを見直し、学習プリントに記述する。
 - ⑦ 考えを発表し合い、次時への自分なりの願いをもつ。



【つなげる段階】 前時にもった願いを基に、願いの実現に向けた活動を行う。そして、本時の活動や単元全体を振り返り、これからの生活につなげる願いをもつ。

- 学習活動 1**
- ① **【深める段階】** の最後にもった願いを想起する。
 - ② めあてを確認する。

- 学習活動 2**
- ③ 願いの実現に向けた活動を行う。

- 学習活動 3**
- ④ 活動を振り返り、これからの生活につなげる願いをもつ。

Ⅲ 指導方法の工夫

1 【視点】を見つける活動を取り入れた学習の流れの工夫

これまでの生活科の学習では、**【試す段階】** の学習活動 1 において、対象への気付きやかかわり方として着目させたい**【視点】** を教師が提示してきた。**【視点】** を知ることで、子どもたちはどんな活動したらよいか見通しをもつことができたが、中には教師の提示に頼ってしまい、主体的に試行錯誤しながら活動に取り組むことが十分にできない子どもも見られた。

そのために、子どもたちが対象とこかかわる中で得た気付きを基に、自分たちで**【視点】** を見つける活動を取り入れる必要がある。そこで、これまでの**【試す段階】** を「**【試す段階Ⅰ】**」と「**【試す段階Ⅱ】**」に分けて、**【試す段階Ⅰ】** において、**【視点】** を見つける活動を行うこととする。**【試す段階Ⅰ】** では、学習活動 1 において**【出会う段階】** でもった願いを基にめあてを確認し、学習活動 2 において対象とこかかわろうと具体的な活動や体験を行う。そして、活動を通して気付いたことを発表し合う。教師は子どもたちから発表された気付きを黒板に整理していく。子どもたちはグループ化された気付きを見ることで、自分たちで**【視点】** を見つけていく。子どもたちは気付きを交流する中で**【視点】** が見つかる、「みんなも**【材料】** を色々工夫しているんだ。やっぱり**【材料】** の工夫は大事なんだ」「**【飛ばし方】** を工夫すればいいことを知ってびっくりした」などと驚いたり発見したりするであろう。この驚きや発見こそが感動であり、感動を味わい心を強く動かされることによって「今度は**【羽根】** の大きさを工夫してもっと高く飛ばしてみよう」などと次への新たな願いをもつことができるようになると考える。そこで、その後、こうした願いに基づいて再び具体的な活動や体験に取り組むこととする。そして、学習活動 3 において、これまでの活動を振り返って気付いたことを学習プリントに記述するとともに、次時への願いをもつ。こうした願いを基に、**【試す段階Ⅱ】** においては、自分たちで見つけた**【視点】** を基にさらに試行錯誤しながら対象とこかかわり、対象への気付きやかかわり方を深めていくこととする。

2 【視点】を見つけるためのカードの工夫

[試す段階Ⅰ]において、具体的な活動や体験を通して得た気づきを基に、自分たちで【視点】を見つける活動を行う。しかし、自分一人では気づきを【視点】に結び付けることは難しい。そのために、子どもたち一人一人が得た気づきを交流し合い、それぞれの気づきを一目見て【視点】にグループ化できるような工夫が必要であると考える。

そこで、[試す段階Ⅰ]の学習活動2において、「はっけんカード」(付箋紙)に記入した具体的な活動や体験を通して得た気づきの中から、みんなに

知らせたい気づきを「スペシャルはっけんカード」

(マグネットシート)に記入することとする。「スペシャルはっけんカード」には、自分の名前と気づき(牛乳パックの羽根がよく飛んだならば「牛乳パック」)を記入していくこととする。そして、

名前	牛乳パック
＜「スペシャルはっけんカード」記入例＞	

このカードをそれぞれが得た気づきを発表する際に、黒板に貼り付けていくこととする。例えば、「牛乳パックの羽根がよく飛んだ」という気づきを発表した子どもがいたならば、同様の気づきを得た子どもに「スペシャルはっけんカード」を黒板に貼らせる。そして、引き続き気付いたことを発表させるごとに、「スペシャルはっけんカード」を貼らせていく。教師は、子どもに「スペシャルはっけんカード」を貼らせる際に、「牛乳パック」「厚紙」などを後に【材料】といった【視点】にまとめていけるように、整理して貼らせていく。

このように、黒板に【視点】ごとにグループ化された「スペシャルはっけんカード」を見ることで、子どもたちは自分たちで【視点】を見つけていくことができると考える。

指導方法の工夫を取り入れた【試す段階Ⅰ】における一授業の流れ

学習活動1

- ① 前時を振り返る。
- ② めあてを確認する。

よく飛ぶ紙トンボを作ろう

学習活動2

- ③ 本時の活動の見通しをもつ。
- ④ 見通しを基に、紙トンボを作って飛ばす。
具体的な活動や体験をし、試行錯誤しながら対象とかかわり、気付いたことを「はっけんカード」に記入する。

⑤ 活動を振り返り、気付いたことを発表し合う。

「はっけんカード」に記入した気づきの中から、みんなに知らせたい気づきを「スペシャルはっけんカード」に記入する。そして発表していき、発表された気づきと同じ気づきを得た子どもも「スペシャルはっけんカード」を黒板に貼っていく。

僕は、牛乳パックで羽根を作って飛ばしたら、よく飛んだよ。



なるほど。他の子で同じように、牛乳パックの羽根で作ったらよく飛ぶことに気付いた子がいたら、「スペシャルはっけんカード」を貼りにきましょう。

私も牛乳パックの羽根がよく飛ぶと思ったわ。



⑥ 貼られた「スペシャルはっけんカード」を基に、【視点】を見つける。

黒板に整理され、グループ化された「スペシャルはっけんカード」を見て、どんなことを工夫していったらよいか、【視点】についてみんなで話し合う。



みんなの「スペシャルはっけんカード」を仲間分けしてみたよ。さて、牛乳パック、厚紙、画用紙…この仲間から、どんな点を工夫するとよいか分かりますか。

<黒板に整理して貼られた「スペシャルはっけんカード」>

【材料】		【羽根】		【飛ばし方】	
名前	牛乳パック	名前	厚紙	名前	小さい羽根
名前	牛乳パック	名前	厚紙	名前	小さい羽根
名前	牛乳パック	名前	厚紙	名前	小さい羽根
名前	牛乳パック	名前	厚紙	名前	小さい羽根
		名前	大きい羽根	名前	大きい羽根
		名前	大きい羽根	名前	大きい羽根
		名前	大きい羽根	名前	大きい羽根
		名前	2枚の羽根	名前	丸い形の羽根
		名前	2枚の羽根	名前	丸い形の羽根
		名前	2枚の羽根	名前	丸い形の羽根
		名前	画用紙	名前	指先で回す
		名前	画用紙	名前	指先で回す
		名前	画用紙	名前	指先で回す

牛乳パック、厚紙…分かった！【材料】を工夫するといいな！



⑦ 話し合いから新たな願いをもち、願いを基にもう一度紙トンボを作って遊ぶ。

話し合いを振り返り、気付いたことや思ったことから新たな願いをもち、願いに基づいてもう一度具体的な活動や体験をする。

「自己を磨く」子どもの姿

紙トンボに対する気付きやかかわり方を深めるために、主体的に試行錯誤しながらよく飛ぶ紙トンボを作って遊ぼうと努める姿。

僕は、【飛ばし方】をかえてみるといいことを初めて知ったから、一度やってみたいな。



私は、まだ他の【材料】を使って試していないから、今からやってみよう。



学習活動3

⑧ 活動を振り返り、気付いたことを学習プリントに記述するとともに、次時への願いをもつ。

上に向けて飛ばしてみたらよく飛んだよ。次も他の【飛ばし方】をやってみたいな。



【材料】は他にもまだまだ工夫できそうだな。次の時間も違う【材料】を使ってみよう。



IV 授業実践例

1 単元名 2年生「もしも～し、聞こえますか？」

2 単元の目標

- はっきり聞こえる糸電話を作って遊ぶことに対する願いを生かしながら、身近にある物を使って進んで糸電話を作ったり、作ったもので友達と一緒に遊んだりすることができる。またこれからも自分の生活の中で身近にある物を使った遊びを考え、友達と一緒に遊んでいこうとすることができる。 <関心・意欲・態度>
- はっきり聞こえる糸電話にするために、【糸の種類】【コップの材料】【糸の長さ】などを考えたり、糸電話を使って友達と一緒に遊ぶ方法を工夫したりすることができる。 <思考・表現>
- 「身近にある物を使って糸電話のような遊びを自分で作り出せるんだな」「作ったもので友達と一緒に遊ぶと楽しいな」などと気付くことができる。 <気付き>

3 活動の概要

【出会う段階】（1時間）

はじめに、教師が作った糸電話（紙コップに長さ3メートルのたこ糸を使用）を見せ、実際に糸電話を使って話してみる。すると、子どもたちは自分でも作って遊んでみたいと思うであろう。

そこで、教師が用意した材料を使って、糸電話を作って遊んでみることにする。子どもたちは活動する中で、糸電話を自分で作って遊ぶことの楽しさを感じるとともに、「もっとはっきり聞こえる糸電話を作りたい」といった願いをもつであろう。



【試す段階Ⅰ】（2時間）

はっきり聞こえる糸電話を作ったり、作ったもので友達と一緒に遊んだりする活動を行っていく。見通しを基に、願いの実現に向けて糸電話を作って遊ぶ活動に取り組んだ後、活動を振り返り、みんなに知らせたいはっきり聞こえる糸電話にするための気付きを「スペシャルはっけんカード」に記入する。そして、「スペシャルはっけんカード」に書いた気付きを発表していく。それぞれの気付きが発表された後、黒板に貼り出された「スペシャルはっけんカード」を基に、【視点】について話し合う。子どもたちは、黒板にグループ化されて貼られた「スペシャルはっけんカード」を見て、【視点】を見つけていくことであろう。そして、話し合いから新たな願いをもち、願いを基にもう一度糸電話を作って遊ぶことにする。

最後に、活動を振り返り、気付いたことを学習プリントに記述していく。このように、驚きや発見といった感動を基に、はっきりと聞こえる糸電話を作って遊ぶことを通して、「【コップの材料】をプラスチックコップにしたらはっきり聞こえたよ。次も他の【コップの材料】を使って糸電話を作りたいな」といった願いをもつであろう。

【試す段階Ⅱ】（2時間×2）

はっきり聞こえる糸電話を作るために、さらに対象とかかわる活動を行う。そして、[試す段階Ⅱ]の最後には、これまでの活動を振り返って「一番はっきり聞こえる糸電話」についての考えをまとめることとする。このように、子どもたちは対象とかかわる中で、一番はっきり聞こえる糸電話が作れたことに対する喜びを味わうとともに、「自分が作った糸電話を友達に紹介したい」という願いをもつであろう。

【深める段階】（2時間）

友達と紹介し合いながら一緒に遊ぶ中で、一番はっきり聞こえる糸電話についての友達の考え

を試してみたり、自分もっていた考えを確かめたりしていくこととする。友達の考えを知り、自分で試してみたいと思った場合は、友達の作った糸電話を試してみることとする。また、自分もっていた考えを確かめたい場合は、友達の糸電話と比べてみることにする。

最後に、活動を振り返って、これまでの自分の糸電話と本時で試してみた友達の作った糸電話とを比べてみて一番はっきり聞こえる糸電話について、学習プリントに記述していく。一番はっきり聞こえる糸電話を見つけることができた子どもたちは、達成感を味わうとともに、「一番はっきり聞こえる糸電話を使って色々な人と遊びたい」という願いをもつであろう。

【つなげる段階】（2時間）

1年生を招いて、一番はっきり聞こえる糸電話を使って一緒に遊んでいく活動を行う。1年生と一緒に遊ぶことで子どもたちは身近にある物を使ってみんなで遊ぶことの楽しさをさらに実感することができるであろう。

最後に、本時を含めた単元全体の活動を振り返る。これまでの活動を通して振り返るとともに、これからの生活につながる願いをもち、学習プリントに記述する。「これからも、身近にある物を使っておもちゃを作って遊びたい」というように、これからも身の回りにある自然や身近にある物を使って遊びを工夫し、遊びを楽しもうという願いをもつことができるであろう。



4 「自己を磨く」子どもの姿に迫るための指導方法の工夫

【試す段階Ⅰ】において、子どもたちが主体的に試行錯誤しながら対象とかかわっていくことができるようにするために、自分たちで【視点】を見つける活動を取り入れることとする。

まず、学習活動1において「はっきり聞こえる糸電話を作ろう」というめあてを確認した後、学習活動2において対象とかかわろうと具体的な活動や体験を行う。その中で「釣り糸を使うとはっきり聞こえたよ」といった気付きを得ていたら「はっけんカード」という付箋紙に気付きを記入していくこととする。

その後、活動を通して気付いたことを発表し合う。その際に、「はっけんカード」に記入した具体的な活動や体験を通して得た気付きの中から、みんなに知らせたい気付きを「スペシャルはっけんカード」(マグネットシート)に記入することとする。教師は子どもたちから発表された「スペシャルはっけんカード」を黒板に整理していき、それぞれの気付きをグループ化していくことで【視点】としてまとめていき、子どもたちに自分たちで【視点】を見つけさせる。子どもたちは気付きを交流する中で【視点】が見つかる、「【糸の長さ】を工夫すればいいことを知ってびっくりした」「みんなも【コップの材料】を色々工夫しているんだ。やっぱり【コップの材料】の工夫は大事なんだ」などと驚いたり発見したりするであろう。この驚きや発見こそが感動であり、感動を味わい心を強く動かされることによって「今度は【糸の長さ】を工夫してもっとはっきり聞こえる糸電話を作ってみよう」といったように次への新たな願いをもち、主体的に試行錯誤しながらはっきり聞こえる糸電話を作って遊ぶことができると考える。

5 授業の実際

「自己を磨く」子どもの姿

糸電話に対する気付きやかかわり方を深めるために、主体的に試行錯誤しながらはっきり聞こえる糸電話を作って遊ぼうと努める姿。

学習活動 1

はじめに、前時に教師が用意した材料を使って糸電話を作って遊んだことを振り返った。そして、子どもたちは、前時の終わりに「次はもっとはっきり聞こえる糸電話を作りたい」という願いをもったことを振り返り、本時は「はっきり聞こえる糸電話を作ろう」というめあてで活動に取り組むことにした。

観察児童の様子

前時に糸電話を作って遊んだことを振り返り、「今日はどんなことをしたいですか」と問いかけたところ、「今日ははっきり聞こえる糸電話を作りたい」と発言した。

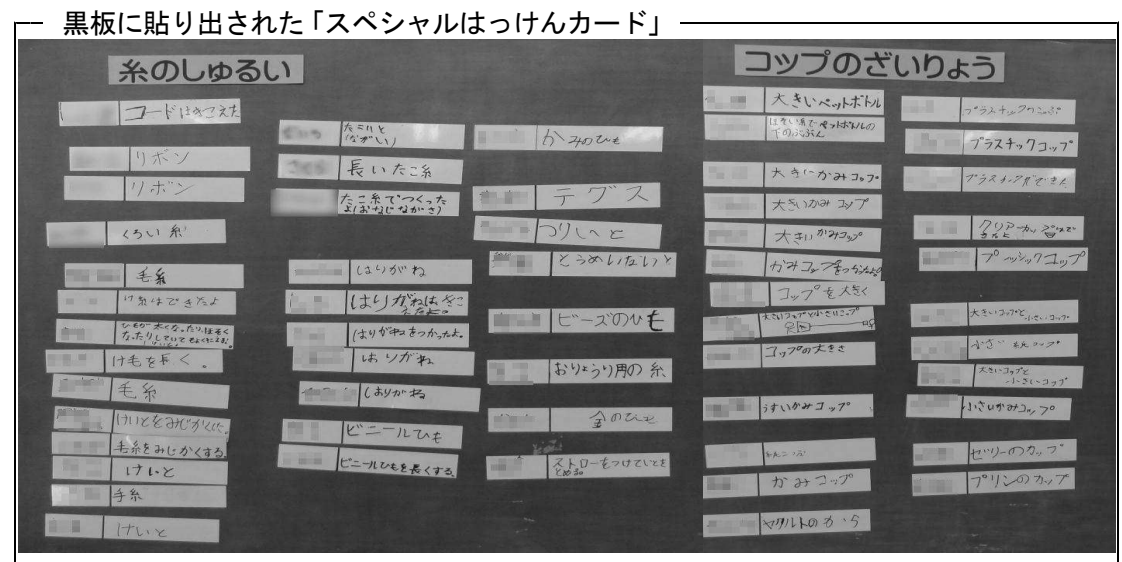
学習活動 2

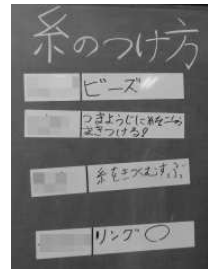
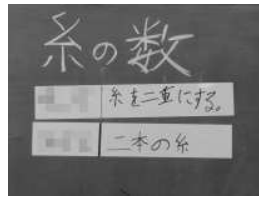
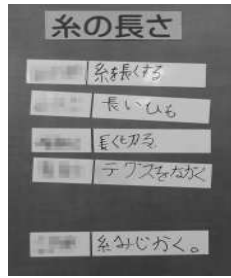
はじめに、「釣り糸を使って糸電話を作ります」といったように本時にどのような糸電話を作るのかを見通しを立てた。そして、見通しを基に、糸電話を作って遊んだ。子どもたちは、試行錯誤しながら糸電話を作って遊び、「釣り糸にしたらはっきり聞こえたよ」「大きい紙コップははっきり聞こえたよ」などと気付きを得ていき、「はっけんカード」に記入していった。

観察児童の様子

「糸の種類を針金にして作りたい」という見通しを立て、作ってみた。すると、針金ははっきり聞こえることに気付き、「はっけんカード」に記入した。また、コップをゼリーカップにして糸電話を作ってもはっきりと聞こえることに気付き、「はっけんカード」に記入した。

その後、活動を振り返り、「はっけんカード」に記入した中からみんなに知らせたいはっきり聞こえる糸電話にするための気付きを「スペシャルはっけんカード」に記入した。そして、「スペシャルはっけんカード」に書いた気付きを発表していった。それぞれの気付きが発表された後、子どもたちは黒板に貼り出された「スペシャルはっけんカード」を基に、【視点】について話し合った。子どもたちは、黒板にグループ化して貼られた「スペシャルはっけんカード」を見て、【糸の種類】【コップの材料】【糸の長さ】【糸の数】【糸の付け方】の五つの【視点】を見つけることができた。





観察児童の様子

「はっけんカード」に記入した二つのことをみんなに知らせたいと思い、「スペシャルはっけんカード」に「はりがね」「ゼリーのカップ」と記述した。また、【視点】について話し合う場面では、みんなが書いた「スペシャルはっけんカード」をよく見て、どんな【視点】になるのかを考え、「長い糸」「短い糸」などが貼られたグループについての【視点】は【糸の長さ】であることを見つけて発表した。

子どもたちは【視点】を見つける活動を通して、「【糸の数】を工夫すればいいなんて初めて知ったから、試してみたい」「みんなが【糸の種類】を色々と工夫していることが分かったから、僕も【糸の種類】をもっと試してみたい」などと新たな願いをもっていた。そこで、次にしてみたいことを学習プリントに記述し、新たな願いを基に、もう一度はっきり聞こえる糸電話を作って遊んだ。「今度は、糸を2本にして作ってみます」と書いた子どもは、初めて糸を2本にしてみても試してみたところ、2本でもはっきり聞こえることに気付いた。また、「他の糸の種類を試してみたい」と書いた子は、これまでたこ糸や釣り糸を試していた子どもが毛糸を試してみたところ、毛糸でもはっきり聞こえることに気付いた。



「はっきり聞こえたよ！」

観察児童の様子

五つの【視点】の中から【コップの材料】を工夫してみたいという願いをもち、学習プリントに「**次はコップの種類を工夫して糸電話を作りたい**」と記述した。そして、まだ試していなかった小さい紙コップやプラスチックのコップで作る、聞こえるかどうか試してみたところ、両方ともはっきり聞こえることに気付いた。



「違うコップは聞こえるかな」

学習活動3

最後に活動を振り返り、気付いたことを学習プリントに記述した。【視点】をみんなで見つけた後、【糸の数】を試してみた子どもは、「糸の数を工夫してみても糸電話ははっきり聞こえることに気付いた」と学習プリントに記述した。また、他の【糸の種類】を試してみた子どもは「糸の種類は色々と使ってみても、はっきり聞こえることに気付いた」と学習プリントに記述した。

その後、次時にはどんなことをしたいかを記述する際は、「今度は【糸の長さ】も工夫してみたい」「もっと他の【糸の種類】を試してみたい」などと書き、新たな願いをもつことができた。



「次は何を試してみようかな」

観察児童の様子

活動を振り返り、「こんなにもいっぱい糸やコップが使えるなんて初めて知った」と気付いたことを学習プリントに記述した。そして、「今度も糸やコップの種類をもっと工夫してみたい」と次時への新たな願いを記述した。

6 分析・考察

観察児童は、黒板に貼られた「スペシャルはっけんカード」を基に五つの【視点】を見つけようと考えることができた。そして、その中から【コップの材料】にまだ自分が試していない材料がたくさんあることに気が付き、「【コップの材料】が他にもいっぱい工夫できそうだからやってみよう」と話し、学習プリントに記述した。その後、もう一度糸電話を作って遊んだ際は、まだ試していなかった小さい紙コップやプラスチックのコップで作ってみることにした。その結果、いずれの糸電話もよく聞こえることに気付くことができた。

このように、観察児童は、黒板に【視点】ごとにグループ化された「スペシャルはっけんカード」を見ることで、はっきり聞こえる糸電話にするためにはどんなところを工夫するとよいかという【視点】を見つけることができた。そして、自分たちで【視点】を見つける活動を通して、【コップの材料】を工夫してみたいという願いをもち、主体的に試行錯誤しながら糸電話を作って遊ぶことができた。よって、観察児童において「自己を磨く」子どもの姿が見られたと考える。

また、観察児童以外を見てみると、【糸の種類】や【コップの材料】を試していた子が、【視点】を見つける話し合いにおいて、黒板に貼られた「スペシャルはっけんカード」から【視点】を見つけだしたところ、【糸の長さ】を工夫してみるとよいことを初めて知って驚き、「糸を2本にしてやってみよう」と願いをもち、試してみる子どもが見られた。この子のように、観察児童以外においても、自分たちで【視点】を見つける活動を通して気付いたことや思ったことから新たな願いをもち、願いに基づいて主体的に試行錯誤しながらもう一度糸電話を作って遊ぶといった「自己を磨く」子どもの姿が見られたと考える。

以上のことから、自分たちで【視点】を見つける活動を取り入れた学習の流れを工夫することと、【視点】を見つけるためのカードの工夫をすることは、子どもたちが「自己を磨く」ために有効な指導方法であったと考える。

V 工夫した指導方法についての分析・考察

本年度は、「自己を磨く」子の姿に迫るために、これまで教師が提示してきた【視点】を、自分たちで見つける活動を取り入れた。自分たちで【視点】を見つけるために、活動を通して気付いたことを発表させる際、「はっけんカード」に記入した具体的な活動や体験を通して得た気付きの中から、みんなに知らせたい気付きを「スペシャルはっけんカード」に記入させた。そして、「スペシャルはっけんカード」を教師が黒板に整理していき、それぞれの気付きをグループ化していくことで、子どもたちは自分たちで【視点】を見つけることができた。

また、子どもたちは【視点】を見つけていく中で、「こんなところを工夫すればいいなんて初めて知った」「こんなところを工夫することはやっぱり大事なんだ」などと驚きや発見といった感動を得ることができた。このように感動を味わうことによって、「次はこんなことがしてみたい」という新たな願いをもつことができた。そして、新たな願いをもった子どもたちは、主体的に試行錯誤しながら具体的な活動や体験に取り組むことができた。

以上のことから、【視点】を見つける活動を取り入れた学習の流れの工夫と【視点】を見つけるためのカードの工夫という2つの指導方法の工夫により、「自己を磨く」子どもの姿に迫ることができたと考える。

このような指導方法の工夫により主体的に試行錯誤しながら具体的な活動や体験に取り組む姿は、どの学年の実践においても見られた。したがって、本年度工夫した指導方法は有効であったと考える。